Fukushima National College of Technology

デカルトにおける技術者倫理の萌芽
―『方法序説』の公衆概念をめぐって ―

The Germ of Engineering Ethics in Descartes
— On the Concept of the Public in *Discourse on the Method* —

（平成16年9月受理）

笠 井　　哲*（KASAI　Akira）

Abstract

The purpose of this paper is to consider the concept of the public in *Discourse on the Method.* And then we aim to confirm that there is the germ of engineering ethics in Descartes. The public is the key word in *Discourse on the Method.* In Descartes we can see the idea of the accountability for the public already. Descartes don't need to shoulder responsibility for the defects of the science and technology. He is the pioneer of the engineering ethics.

1．はじめに

今日、科学技術文明のもとで生じる公害や自然の生態系の破壊に心を痛めるかなりの人々が、科学技術の進歩に対して懐疑的である。とりわけそれが人類の死滅を招来しうる核兵器を産出したことから、一部に文明の未来に対して出口のない絶望感が見られる。

ところで、反科学技術の論陣によってデカルトが槍玉に挙げられ、「諸悪の根源」といわんばかりにその「合理主義」、「理性主義」が攻撃されている。デカルトこそ、まさに科学技術による人間の自然支配の考えを生み出した問題の哲学者だという。近代の科学技術が、デカルトによって基礎づけられたことから、現代の科学技術の問題点の責任を、デカルトに押し付ける傾向も見られる。近年関心が高まってきた「技術者倫理」も、デカルト主義に対するアンチ・テーゼのように捉えられている、果たして、本当にそうなのだろうか。

確かに科学技術の発達に伴って、知識は高度に専門化されて、次第に公衆の目に不透明になっている。公衆は、科学技術からますます遠いところへ置かれつつある。しかしまた、公衆は日々高度化される科学技術の知が生み出すものから多くの利益を受けて、より豊かで安楽な暮らしを送ることができるようになってきてもいる。

それと同時に、彼らがそうした科学技術の産物のもたらす悪影響を最も直接に被ることもまた事実である。手の届かないところで、ブラックボックスのような仕方で存在する科学技術が産出してくる多くの困難な問題に直面しながら、公衆は、科学技術の知識をごく少数の担い手の側に、一方的に預け放しにしてはならないと感じているであろう。

こうした状況にある現在、哲学史の観点から、科学技術の知と公衆との関わりを再考することも意義がある。近年の「技術者倫理」によって、守られなければならないとされるのが「公衆」の存在である。そこで、本稿では、近代科学技術を歴史の舞台に立ち上げたデカルトの『方法序説』の「公衆」概念をめぐって考察し、そこに「技術者倫理の萌芽」が見られることを確認したい。

2．『方法序説』における「公衆」

では『方法序説』の第６部を中心に、「公衆」という概念の検討をしてみたい。それに先立って、『方法序説』第６部が、この書全体の中で如何なる位置をしめているかを確認しておこう。

＊ 福島工業高等専門学校　一般教科（社会）　（いわき市平上荒川字長尾30）

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

テキストクリティークによると、第６部は『方法序説』全体の中でも最も早い時期に、続く論考である『屈折光学』および『気象学』の序文として起草された。この考証にしたがって、また『方法序説』がその後に続く自然学に関する三試論の序説であった点も考え合わせれば、第６部こそが内容の上でも、そこから出発してその周りに『方法序説』の他の部分や続く論考全体が肉付けされていった出発点であり、いわば要であるといえよう。さらにそうならば、デカルトが「公衆」への呼びかけをもって始まる第６部をまず書くことから『方法序説』の執筆に着手した事実を重く見るべきであろう。

当時のデカルトは、突破しがたいディレンマに身をおいていた。すなわち、自己の学説を公表すれば、反対や論争に巻き込まれて、彼自身の目指す知の改革の自由な推進を妨げられる。逆に、もし公表しなければ、今度は正当な評価を受けることができず、不当な非難に身をさらさなければならない。知の改革の自由な推進と自己の正当な地位の維持というこのディレンマを、デカルトは如何にして切り抜けたのだろうか。

ところで、デカルトが語りかける読者とは、すなわち「公衆」である。デカルトは自己の学説をあくまで自己改革のみを目指す、それに関してのみ意味を持つものとしつつ、それを公表する。それが『方法序説』全体を貫くレトリックである。そしてこのレトリックが、最も明瞭な形で現れているのが第６部であり、そこでこのレトリックの機軸を支えているのが、微妙な立場を与えられた「公衆」なのである。

以下で、『方法序説』に即して、デカルトによって「公衆」の概念が、如何に展開されるのかを追跡したい。まず、この語は『方法序説』全体の中で、どのような用い方をされているか。デカルトは「公衆」の語を、三つの観点から用いている。第一に、自己の思想の私的領域と対比される公的領域を指示する言葉として。第二に、彼の推進しようとしている知の改革の協力者・成果の受益者としての公衆という意味において。第三に、彼の学説の聴衆、さらにはその正当性の審判者としての公衆という意味においてである。

それでは、まず第６部に先立って、第２部から見ていこう。「公」に関する事柄の改革は、自己自身に関する事柄の改革よりもずっと困難である。デカルトを真理の探究へと向かわせた動機は、

> 自分の思想を改革しよう[1]

というものであった。この自己改革の企てについて彼は、

> 私がその時までに受け入れ信じてきた諸見解全てに対しては、自分の信念から一度きっぱりと取り除いてみることが最善である[2]。

と確信し、またそれゆえに、

> 古い基礎の上だけに建設し、若いころに信じ込まされた諸原理にだけ、それが真かどうか吟味もせずに依拠するより、このやり方によって、はるかによく自分の生を導いていくことに成功すると堅く信じた[3]。

と述べている。注目すべきは、同じ箇所において、デカルトがこの自己改革の企てに対比させつつ、「公のごく小さなことの改革」に言及している点である。彼は、

> この場合にもさまざまな困難があるにせよ、対応策もあり、公のごく小さなことを改革する際にも見られる困難とは比べものにならなかったからだ[4]。

といっている。また

> そうした公の大きな組織は、いったん倒されると再建は至難で、単に動揺を受けた場合も、持ちこたえることさえ困難をきわめ、しかもその崩壊はきわめて苛酷なものにならざるをえない[5]。

ともいう。これは、モンテーニュに類似している。モンテーニュは、『エセー』で次のように述べる。

> なぜなら国家というものは、いろいろな要素が緊密に組み合わされた建物みたいなもので、その一つを動かせば必ず全体がぐらつくからである[6]。

デカルトは、『エセー』のこの箇所を下敷きにして上の一文を書いたのであろう。とするならば、ここでは「公」という語が指示するのは、モンテーニュの場合、習慣の力の強大さに感嘆するあまり、全ての改革を否定する。しかしデカルトは逆に、自己の内なる事柄の改革が、究極的には外なる事柄の改革にもつながると考えている。

デカルトの野心は、若き日以来、既成の学問体系を根本的にくつがえし、新たな学問体系を建て直すことであった。『精神指導の規則』の冒頭で、デカルトがこのもくろみを、「技術」的なあり方をしている旧来の知のあり方を批判するという形で語る。このときデカルトは、知の改革が単に自己の内なる事柄の改革にとどまるなどと考えていなかった。新たな「学問」知識は、個別的な事物や目的の側から制約を受けない分だけ応用が利いて、あらゆる状況において人間が正しい判断を下すのを助けうると考えていたのである。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

この意味では、デカルトの目指した「学問」的知識こそが、将来本当の意味で「公」の役に立つものとなりうるともいえるだろう。ただデカルトは、

確かに、学問のこれら正当な成果を期待することはできる[7]。

けれども、

もし我々が研究途上でそのような成果について考えたとすれば、他の事物の認識のために必要な多くの学問を、一見したところあまり有益でないとかあるいはたいして関心がもてるとは思えないとかの理由で、無視してしまうことがしばしば起こるからである[8]。

という点に読者の注意を喚起している。とにかくデカルトが、彼の企てている知の改革が自分自身の思想の改革のみにとどまるものではないと思っていたことは明らかである。そしてデカルトが、学問改革からして人類の福祉を根本的に推進することの方が、一国家や一国家に関する事柄の改革からしてそれを目指す以上にずっと実効あることだと一貫して考えていたことも推察される。

デカルトは、結局自分の企てる新しい学問が、「公」の利益に資するものであることを確信している。彼は、自分の見出した自然学に関しての一般的知見が、人生にきわめて有益な知識を、そして「実践的哲学」を導くものであり、それは我々をいわば自然の主人にして所有者たらしめることであると確信している。そして彼は、そういうすばらしい未来を望む彼の学説をひた隠しにしておくことは、

力の及ぶ限り万人の一般的幸福をはかるべし、という掟に照らして大きな罪を犯すことになる[9]。

とまで考えた。しかし、人生の短さと実験の不足は、研究を推進するのに妨げとなる最も大きな二つの障害である。それゆえデカルトは次のように考える。

この二つの障害に対して次のこと以上によい策はないと判断した。それは、自分の発見したことが如何にささやかでも、すべてを忠実に公衆に伝え、すぐれた精神の持ち主がさらに先に進むように促すことだ。その際、各自がその性向と能力にしたがって、必要な実験に協力し、知りえたことをすべて公衆に伝えるのである[10]。

デカルトは当初このような判断から、研究成果を『世界論』の表題の下に公表しようと計画し、

公衆がそこからうることのできる利益を明らかに示したいと思ったのだった。そのようにして、人間の幸福を一般に願うすべての人々、つまり見せかけや口先だけの有徳なのではなく、真に有徳なすべての人々から、彼らがすでに成し遂げている実験を私に伝えてもらうとともに、なすべく残されている実験の探求において私を助けてもらおうと期待した[11]。

のであった。ここでは「公衆」の語は、先の第２部に見られる用例と比べると、「人類一般」という意味にまで拡大されている。デカルトは、結局彼の建設しようとしている新しい学問が、人類一般の「公益」に資するものとなることを望んでいたといえよう。

それにもかかわらず、デカルトは彼の研究成果を公表することを手控えた。この間の事情には、『方法序説』第６部でデカルト自身が説明しているように、また一般にもよく知られているように、直接的にはガリレイ事件の影響があった。デカルトは、第６部冒頭で次のように述べている。

さて今から三年前、私はこれらすべてを内容とする論文を書き上げて、印刷業者の手に渡すために見直しを始めていたのだが、そのとき次の知らせに接した。私が敬服する方々、しかも、私自身の理性が私の思想に及ぼす権威に劣らぬほどの権威を私の行動に及ぼす方々が、ある人によって少し前に発表された自然学の一意見を否認した、というのである。私自身同じ意見だったと言うつもりはないが、しかし次のことは言っておきたい。その方々の検閲がでるまでには、宗教に対しても国家に対しても有害だと想像されそうな点、したがって、もし仮に理性によって私が納得したならば、それを書くのを妨げるような点を、少しもその意見の中に認めなかった、と[12]。（中略）自分の意見を公表しようとしていた私の決意を翻させるには、これだけで十分であった。

彼の「理性」は、デカルトが書くことを、彼の「思想」を妨げはしなかった。しかし彼らの「権威」は、デカルトが公刊しようとしていた決心を、彼の「行動」を変えさせたのであった。

しかし、デカルトはその後三年、再び自然学についての三試論を含む『方法序説』の公刊を決意する。そのいわば翻意についての釈明といえるのが、『方法序説』第６部のテキストなのである。

上に引用した第６部冒頭の箇所に続くテキストを、引用しておこう。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

そしてこういう理由はいずれも、私がここでそれを述べておきたいばかりでなく、おそらく公衆もそれを知りたいと思われるだろう[13]。

ここでデカルトは、自らの決断の正当性は権威にではなく、彼が思い描く「公衆」であると読者に訴えることによって、彼らに判断してもらおうとしている。また、ここでデカルトは、そういう「公衆」でありうる彼らが権威から自由であると見なしている。そうでなければ、どうして彼らに訴えることができようか。

『方法序説』の出版は、『世界論』とはやや異なり、少々込み入った意図の下に計画されたと考えられる。それは、学問研究の成果を公表するという社会的行為それ自体が孕む政治的な意味を読者に問うという、そしてそれを問いうる彼らを「公衆」として想定するという、単に学問的である以上に政治的な意図も秘めていた。それだけにこの書物の構成は、周到なものである。そして、デカルトはこの６部をはじめに書いたのである。

３．ガリレイ事件と『世界論』

以上のように、『方法序説』の第６部には、ガリレイ事件を知ったため『世界論』の出版を取りやめたことを、その後いくらか思い直して、別に三つの試論を書き、この書を公刊するに至った次第が述べられる。

まず冒頭の一節で、自分はコペルニクスの地動説をとっているつもりはないと断った上で、こうはいっておきたいとして、次の二点を指摘している。すなわち、第一にローマの検閲の前までは、地動説の中に聖俗の権威にとって有害であると思えるような点は認められず、したがって仮に理性が地動説をとらせたとするなら、自分にそれの発表を思いとどまらせた点は何一つ認められなかった、という。第二にしかし、自分はこれまで、きわめて確実な論証なしには如何なる新たな意見をも自分の信念の中へ取り入れまいと大いに用心してきたものの、ガリレイ事件のようなことがあると、自分の意見の中には誤っているものもやはりあるかも知れぬと恐れたという。このため自分は、『世界論』の公表を見合わせざるをえなくなったと付け加えている。簡単にいえば、地動説の真なることは確信するが、今すぐ火中の栗を拾いたくないということである。

さてデカルトが『世界論』の原稿を手元に留め置くことにした理由は以上で尽きているが、この後さらにデカルトは、改めて念を押すかのように『世界論』の公表をいったん決心した理由、その決心を捨てる口実となった理由、これらの双方の理由について詳しい説明を試みる。

『世界論』の公刊を思い立った理由としては、第一に、それが万人の幸福を増しうるものだ、ということが力説される。形而上学や道徳に関しては、各人がそれぞれに信ずるところもあろうから、あえて自分の考えを持ち出そうとは思わなかったが、自分の獲得した自然学の原理については、それらをさまざまな特殊問題において試しはじめている。それら原理がどこまで導きうるか、また今まで人の用いてきた諸原理とどれほど違っているかを認めるや否や、それらを人に知らせずにおくことが、我々の力の限りあらゆる人間の一般的幸福をはかれと命ずる掟にそむくことになると考えるに至ったという。自分の自然学の原理からは、学院で教えられる「観想的哲学」の代わりに、一つの「実際的哲学」を見出すことができ、これによって我々は、

火、水、空気、星、天空その他我々を取り巻くすべての物体の力や作用を、職人のさまざまな技能を知るようにはっきりと知って、同じようにしてそれらの物体をそれぞれの適切な用途に用いることができ、こうして我々をいわば自然の主人にして所有者たらしめることである[14]。

デカルトはフランシス・ベーコンと同じく、自然の技術的応用に大きな期待をかけているのである[15]。そして、自分の自然学は、ただ「無数の技術の発明」という点から望ましいばかりでなく、また主として、「健康の保持」という点からも望ましいのだという。

身体ならびに精神の無数の病気、そしておそらくは老衰さえも、我々がその原因を知り、自然が提供してくれ医療すべてについて十分な知識を持つならば、免れうることである[16]。

彼は自らの自然研究が医学の進歩をもたらしうること、医学が身体の健康のためのみならず精神のためにも役立ちうることを確信した。

精神でさえも体質と身体器官の状態とに多分に依存しているため、人間たちを共通に今までよりもいっそう賢明で有能にする何らかの手段を見出すことが可能だなとすれば、その手段は医学の中にこそ求めるべきだと私は信じているからだ[17]。

とまでいっている。しかし、このような効用を持つ新たな自然学を完成するには、自分の一生では足りないし、

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

実験も不足している。そこで、自分の見出したことはすべてありのまま世間に伝え、有能な人々に自分の仕事を引き継いでもらうなり、必要な実験に協力してもらうなりしなくてはならない。これが『世界論』を公表する気になった、第二の理由であるという。

ところで、このときデカルトは、自然学においては、我々の知識が進めば進むほど、いよいよ実験が必要となることを認めたといい、自らのとった探求の順序を次のように回顧している。

> 第一に、この世界に存在する、あるいは存在しうるすべての事物の原理または第一原因を、全般的に見出そうとつとめた。ただしそのために、世界を創造した神のみを考慮し、我々の魂に自然にそなわっているある種の真理の種子からのみ、それらの原理を引き出した。その後で、これらの原因から演繹できる第一の、最もあたりまえの結果は何かを検討した。それを通して私は、天空、天体、地球を見出し、さらに地球の上に、水、空気、火、鉱物および、すべての中で最も普通で、一番単純で、したがって一番認識しやすい他のいくらかのものを見出したと思う。次に、もっと特殊なものに降りていこうとしたとき、私の前には実に多種多様なものが現れたので、もし神が望めば地上に存在することのありえた、他の無限に多くのものから、現に地上に存在している物体の形相ないし形質を区別することも、ひいてはそういうものを利用できるようにすることも、人間の精神には不可能だと思われたほどだ。結果から先に見てそこから原因に達していくようにし、多くの特殊な実験を利用するのでなければ、不可能なのである(18)。

ここに、デカルトの自然学の特徴が表明されている。つまりデカルトは、自然学の一般的原理については、直感に訴えるだけで十分であり、ごくありふれた事物についても、別に実験を必要としないが、化学や生物学の領域では、特殊な事実を一般的原理から演繹するのに多くの違った仕方が可能であるから、どの演繹の仕方をとるのが正しいか、確かめるための実験を工夫しなければならないという。そして、

> 私はいまや、そのために役立ちそうな大部分の実験を行うのに、どんな角度から手をつけねばならないかが十分にわかる地点にまで達したと思う(19)。

という。しかしまた、そういう面倒な多数の実験を実行するには、自分一人の力では足りないことも明らかであったから、自分は人々の協力に期待する気になったという。

ではデカルトが『世界論』の公表を中止したことについて、ガリレイ事件の他に、どういう理由が挙げられているか。デカルトはいう。自分はいくらかでも重要だと判断した事柄はすべて、それの真理を発見するにつれて記し続けねばならないと考えた。それは、事柄を十分に吟味する機会を多くするためであって、考え始めたときには真であると思われたものが、紙に書こうとすると虚偽に見えたことが度々あったからである。しかしながら、自分の書いたものを発表したなら、必ず人々の反対や論争を引き起こし、自分の仕事のための時間を奪われる。そういう反対論は、事柄の理解を深めるのに役立つかもしれないが、自分の経験に照らしていえば、

> 私は学校で行われている討論というやり方で、それまで知らなかった真理を何か一つでも発見したということも、見たことがない(20)。

これが第一の理由である。

第二の理由は、自分の思想を伝えてみても、人々がそれから受け取る利益はあまり大きなものではありえない、ということである。

> 他の人から学ぶ場合には、自分自身で発見する場合ほどはっきりものを捉えることができず、またそれを自分ものにすることができないからである(21)。

ここでもデカルトは自らの経験を持ち出して、

> もし私が若いときからすでに、後になってその論証を探求したすべての真理を人から教えられ、それを知るのに何の労苦もしなかったとしたら、それ以外の真理を知ることはできなかったであろう(22)。

という。要するに、

> それを始めた当人ほどうまく完成されないという仕事がこの世にあるとすれば、それこそ私がいま苦労している仕事なのである(23)。

そして第三に、実験に関しても、他人の協力に多くを期待できないことが述べられる。一人の人間が無数の実験をすべてやりおおせないことは勿論であるが、たとえば錬金術士たちは、実験を秘密と称して、決して人に伝えようとしないし、たとえ伝えてくれたとしても、役に立たないものが多い。また善意の協力者たちも、いろいろ立派な提案をするだけでそのどれも決してうまくいかないばかりでなく、必ずその報酬として、何らかの問題に

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

ついての説明とか、少なくとも無益な挨拶や談話を求めるが、これはわずかな時間の費えではすまないものであるという。これもデカルトには実際に覚えのあったことであろう。

これらをすべて勘案して、1633年末のデカルトはすでに書き上げていた『世界論』はもちろん、自分の自然学の基礎を人々にわからせるような、如何なる他の論文も発表すまいと決心したのであった。しかしその後、また二つの別の理由が現れたので、若干の特殊な試論を書き、かつ自らの行動と計画とについての報告を公にせねばならなくなったという。第一の理由は、もしそうしなければ、自分が『世界論』の公表を思いとどまった原因が、自分にとって事実以上に不利なものだったと見られる恐れがあるということである。第二の理由は、自分の計画を打ち明けることにより、如何なる点で人々が自分に協力しうるか知ってもらいたいということである。そして最後にデカルトは、今後の自分の仕事の見通しに触れて、これからは医学にかかわりある研究のみに専念したいと思っていること、ある人々を益すれば必ず他を害するような、軍事技術の研究などに携わるつもりのないことを表明している。

4．公的なものと私的なもの

ここで分析しておきたいのは、デカルトの「公衆」に対する態度である。一方において、デカルトは他人に自己の学説を公表・伝達しうることのデメリットを語りつつ、次のように述べている。

> けれども、私の生存中それが公表されることは一切同意してはならないと考えた。私の書いたものはおそらく反駁や論争を免れないだろうし、それが私にもたらす名声がどんなものであっても、そうしたことが、自分を導くために使おうと予定している時間を失うきっかけになることは絶対避けたいからである[24]。
> もし私の自然学の基礎を公表すれば、（中略）他の人たちの各種各様のあらゆる意見と一致するのは不可能であることから、これが引き起こす諸反論によって、私がたびたび自分の仕事から心をそらされてしまうことが予測されるのである[25]。
> 私の意見の批判者として、私は、私自身ほど厳正で公正だと思われる者にはほとんど出会わなかった[26]。
> 私は自分の見解のいくつかを、非常にすぐれた精神の持ち主に説明したことが幾度もあるが、彼らは私が話している間はきわめて判明に理解したように見えたにもかかわらず、それを彼らがもう一度述べる段になると、ほとんどいつも、もはや私の見解だとは認めることができないほどに変えてしまっていることに気がついた。なおこの機会に後世の人たちに、私自身が公表したものでなければ、私の意見だと他の人がいっても、決して信じないようにお願いしておきたい[27]。

デカルトは、書物の公表の効果についても、きわめて悲観的である。さらにデカルトは、

> 公衆が進んで私の利益をはかってくれると期待するほど自惚れてはいない[28]

とし、ついには、

> 完成できる自信のないような約束を、一つでもして公衆に責任を負いたくもない[29]。

とまでいっている。「公衆」に対して、もはや何の関心も期待もしない、約束もしないというこの発言からするに、デカルトは研究の公の場への発表・伝達ということに関しては、完全に考えを翻したかのように見える。

だが、デカルトは、他方において、「公衆」に対してもう一つの視点を持っている。

> 私がここでそれを述べておきたいばかりでなく、おそらく公衆も、それを知りたいと思われるだろう[30]。

という先に引いた第6部冒頭の呼びかけは、権威に対してではなく、自由な「公衆」でありうると予想される読者に対して、学者個々人の学説発表の自由、その権威からの独立を主張し、また同時に自己の主張の是非を問おうとするデカルトの呼びかけであった。デカルトは最終的にこの「公衆」の存在を信じている。そして、第6部後半はこの呼びかけに正確に呼応している。デカルトは、何ゆえ再び決心を翻し、『方法序説』の公刊に踏み切ったかについての弁明を以下に展開している。デカルトの弁明とは、次のようなものである。

> それでもやはり、自分の行動を罪悪であるかのように隠そうとしたことは一度もないし、人に知られないよう、むやみに用心したこともない。そうすることは自分を害するようになると考えたからであり、また私に一種の不安を与えることになって、求めている完璧な精神の平穏にまたしても反するようになりかねないからである。そしてこのように、世間に知られるか知られないかという気がかりの中で、どちらとも思わずずっと過ごしてきたのだが、ある種の評判が立つのは防ぐわけにはいかなかったため、とにかく悪評だけは免

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

れるように最善を尽くさねばと考えたのだった[31]。

自分より長生きする人たちに後日私を非難する口実を与えるほど、自分自身に不利なことはしたくないからである[32]。

理由が二つ挙げられるが、根本は実は一つであろう。私自身を不当に扱うことへの抵抗感、「精神の平穏」の追求、非決定に身をおくことの忌避、そのためには「最善を尽くすべきだ」との考え、これらはみな、ある意味でデカルトの思想の特質を根本的に決定づけているモチーフばかりである。それらが背後で複雑に錯綜し、合流して、結果としての『方法序説』が書き上げられている。『方法序説』という書物が、如何なる性格の書物であるかを一義的に捉えることは不可能と思われるが、それでも一つ指摘するならば、そこでは私的な価値の追求と公的な価値の追求という一見相反する方向性が矛盾を孕んだまま書き手において統一されているという点にこの書物の優れた特徴があると思われる。「精神の平穏」といえば、それは私的な価値である。「私」としては急いで誤った結論を導くよりも、非決定に身をおいておく方がよいと、デカルトはいつも考えている。他方、私自身を不当に扱うことは「私」としても許せない。それを回避するためには私は、最善を尽くして努力しなければならない。そして、そのためには「公衆」に訴える以外に策はない。こうした一見矛盾する態度の錯綜が頂点に達するのが、『方法序説』第６部なのである。

とにかく、ここではもはや研究成果を発表し人々に伝達して、自己の研究を後代の研究者に引き継いでいってもらおうなどということは問題になっていない。自分の著作を、人々によく吟味してもらうことだけが問題なのである。そして、その人々とは「公衆」である。デカルトはそのために、この書物をラテン語でなく、自分の国の言葉であるフランス語で書いたのだともいう。なぜなら、

自然の理性だけを全く純粋に働かせる人たちの方が、古い書物だけしか信じない人たちよりも、いっそう正しく私の意見を判断してくれるだろうと期待するからである[33]。

すなわち、良識だけを武器とする「公衆」だけが、かれの著作の真の読者たりうる、とデカルトは考えたのである。しかも、そういう「公衆」が現実に存在しているかいないかに関わらずである。とにかく、そういう「公衆」である読み手を思い描きつつ、デカルトは『方法序説』を書いた。そう想い描くことによって、自ら満足しようとした。さらに、デカルトは次のように述べている。

そして良識と学識を兼ねそなえた人々、彼らだけを私の審判者としたい[34]。

デカルトの「公衆」を志向する姿勢は、終生変わらない。結局、デカルトは上にも見るように、最終的には、学問的知識のあり方の正しさを主体的に判断する審判者として「公衆」の観念を定位しているように思われる。しかし、その存在はデカルトにとって、いまだ実現されない理想であった。

以上のように、『方法序説』のキーワードの一つである公衆の概念の考察により、特にガリレイ事件に対する態度には、現代の技術者倫理でも問題となる「公衆に対する説明責任」重視の思想が見られる。したがって、デカルトは「技術者倫理」の自覚を引き起こした科学技術のマイナス面を担っていたのではなく、当初より科学技術のあり方に配慮していた「技術者倫理」の先駆者として評価されるべきであるといえる。

5．おわりに

本稿で描かれたデカルト像は、これまで考えられてきたデカルトのイメージからは程遠いものかも知れない。たとえば、アレントは「近代哲学の父」デカルトの功績について、次のように評価している。

近代哲学は、魂や人格や人間一般には関心を示さず、もっぱら、自我に対して関心を注ぎ、世界や他人との経験をすべて人間の内部における経験に還元しようと試みてきた。これは、デカルト以来、近代哲学の最も一貫した傾向の一つであり、おそらく哲学に対する近代の最も独創的な貢献でもある[35]。

確かに形而上学者デカルトには、この評価があてはまる。しかし、これまで見てきたデカルトの姿は、この把握を越えたところにある。デカルトを特徴づけているのは、彼の「退きこもり」への傾向である。

しかしデカルトは、自身の「退きこもり」の持つ意味を「公衆」に問うことを忘れなかった。そうすることによってのみ、自分自身の「精神の平穏」も得られると考えたからである。留意しておかなければならないのは、このとき問われているのはデカルト自身の学説の客観的な正当性と同時に、学問するという行為それ自体の世に中におけるあり方ということである。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

今日、科学技術の知のあり方が問われている。しかし、そこで問われているのは、いつもその知の探求を現実に遂行する主体を離れた、何か実体的に存在すると仮想される「科学技術」のあり方であると思われる。だが、まさにこの問い方にこそ問題があると思われる。近代初頭にあって、そうした問い方と異なる問い方をもって、自分の哲学を世に問うたデカルトの姿勢には、まだまだ学ぶものは多い。すなわち、

デカルトにならって、科学技術の進歩を人間の福祉と文化の高まりにつながる基本線の上で捉えるべき(36)であるといえる。

註

（1）テキストは、デカルト『方法序説』谷川多佳子訳、岩波文庫、1997年を使用したが、適宜語句を変更した。24頁。
（2）同、23頁。
（3）同前。
（4）同前。
（5）同前。
（6）モンテーニュ『エセー』原二郎訳、岩波文庫、1965年、222頁。
（7）デカルト『デカルト著作集４』大出晃他訳、白水社、1973年、12頁。
（8）同前。
（9）『方法序説』、82－83頁。
(10) 同、86頁。
(11) 同、23頁。
(12) 同、80－81頁。
(13) 同、81頁。
(14) 同、82頁。
(15) この点については、拙論「科学技術史におけるベーコン」、『研究紀要　第42号』福島高専、2002年、137－144頁を参照されたい。
(16)『方法序説』、83頁。
(17) 同、83頁。
(18) 同、84－85頁。
(19) 同、86頁。
(20) 同、91頁。
(21) 同前。
(22) 同、95頁。
(23) 同前。
(24) 同、87頁。
(25) 同、89－90頁。
(26) 同、90－91頁。
(27) 同、91－92頁。
(28) 同、98頁。
(29) 同、102頁。
(30) 同、81頁。
(31) 同、97－98頁。
(32) 同、98頁。
(33) 同、101－102頁。
(34) 同、102頁。
(35) ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994年、411頁。
(36) 河野勝彦『デカルトと近代理性』文理閣出版、1986年、14頁。

NII-Electronic Library Service